

# 釜の遊び 千ヨ、ノの同覗き

篠田 修

先局に登場した髯長族が、酒に味をしのこの二番煎じ、梅田の暗い面を拾って、千ヨイト遊びにあらめれた。さてさて、その感想は如何、

「遊ぶ」の特異とかで、飲む、打つ、買うの三拍子そろった種々崎へ出張、さすがに買うのはひかえたへ残念ながら金がない。

打つ方は百円でも式百円でもできると

あ、て熱力した。ところがなんとまあ、ボート

へ住の江はハズレ。サイコロはくちの千ヨボ

一もダメ。ドチンコもだめ、アしニシボールと

やれもダメ、あもしろかったのは五ゲームぐら

いさ、のんびり考えごとをしながらもできる。

ちさいとこのゲームの要領を説明すると、B

五ぐらいの大きさのボール紙に、タテヨコ各五

目づつまス目がある。そのエに色分けがあつて、

一番左から順に、緑、白、赤、黄、黒に付、  
二いろ。そしてそれ以外の列にマス目の中に  
1から5までの番号が書いてある。とまん中は  
サードビス。この台紙が二枚へ初め番へ用意さ  
れて、そしてオハジギが各自に5ヶくらい置  
てある。

ゲーム開始を同時にマイクで、赤の番、  
黄の○番と、順に出てくるボールの色と番号  
を讀みあげる。その色と番号の確当する所へ  
オハジギを一つづつ置いていくのである。そ  
うしてタテ、ヨコ、斜めいずれでも良いから、  
一列に早くそろえばいいのである。讀みあげ

られるボールの数は約20ヶほど、それら一ゲームが終る。

このゲームは、一つには運だめしのうな所があるが、馴れた人になると、台球を六枚も八枚も用意してそれだけにオハシキを置いていくのを、早くそろそろ確率が所い。それに台球は、一枚一枚が異なるので、全くうまくそろわない場合もいくらかある。ちなみに台球は5枚分百円。製品はスピードが勝敗を決するうちに、一筆の製品、二筆の製品、それ三筆以下は同じ、ハズレはなしとなる。

あとで聞くとそこによると、このゲームは、日本広しといえども、やっている所はここだけというはなしで、ひよ、としそこのうらなくなることもあるかもしれない。や、ておくのは今のうちということだろう。

さてさて、私のようは素人衆にと、てみれば、むづかしい約束事のある賭けごとには手が出なかつた。それ故、簡単なヤツにちま、

だ。スッカラカニにならないためのいい方法なのだ。

熱中してしま、て、二れでもか二れでもかどつぎこんでいくと、キリがないからだ。二のときも、にいちやん、こんなことにセイを出さんと、ちま、とや、て帰リや。勉強にはげまなアカンぞ、というわけ、学生さんに見られてしま、た。

最後に、バックミュージックにの、て踊りと芝居をや、ている、浪速クラブのはなを。

十メートル四方くらいの座席と、そのまわりには立見できる広さのある劇場だが、皆楽しそうに民謡に手拍子をつけたり、台の手拍子ではやしたり、中々并当でも持、て入れ、ゆ、くり時間がつぶせる娯楽だ。

おじいちゃん、おばあちゃんから子供まで、和気あいあいとしたふん囲気の中、人気役

と手を出してみたが、勝負運がなが、た。

|   |   |   |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | 6 |

上の図は三角公園の、チヨボーというサイコロバケの台で、目を当てるだけのものである。

これは、賭け方も二通りあり、て、ろとろの両方にかけるとか、一ヒラの両方にかけるとかできる。原則そのものがあるれば、賭け金の5倍がラスされてもど、てくる。ふたまたまかければ、二、五倍がラスされる。

五百円、千円という大金は嫌いから、フイ式百円くらいをやる。これでは最初から勝ち目はないのだろう。それでも教文てく出る人はい、て、ちま、と式百円でこれという所には、て、当たれば千円もうかる。もうかたところ、ちま、と一パイ飲む。それからまたきて、はる。又当たる。又、ちま、と一パイ飲む。次ははずれる。そこでドマに帰るころには、いい気分にな、てい、という具合

酒が出ると、拍手が一層大きくな。たりして、見る者を引き込めという、気楽さだ。三百円を半日はゆ、くりできるの、で、退屈のぎに、もい、のとはと思、た。

それにしても、金というところは、飲む打つ買う、なんでもござれのゴキヤマセ世界。壁々とバケチのあつたもこころらにだろう。ボクの見て歩いたときも、みさし、のり、のり、天気、三角公園の回りは全部、馬、ボート、競輪の花ごさりだった。それに、お客にサイダーを出したクスイカを配、たりのサイドス満点。こんないい所は他にないのじゃな

い、の、ほんじ、ま。